

※作者注※

本作の内容は2007年に公開された映画「キサラギ」に人物・状況設定・話の展開等全般において酷似しておりますが「キサラギ」の原作舞台が2003年に中野・劇場MOMOにおいて初演されたのに対し、本作はそれに先立つ7年前の1996年に荻窪アールコリンにて上演された作品であることを明記しておきます。

「10年目の交霊会」

竹村 直久

登場人物

梨明	秋	(29)	高等学校教員
霧河	勝	(29)	警察官 (私服刑事)
田中	誠	(29)	ミュージカル俳優を夢見る
安井	正次	(29)	銀行員
時元	冴子	(29)	OL 正次のフィアンセ

舞台は地下室である。

中央に大きめのテーブルがあり、周りに五つの椅子がある。

壁に時元冴子（十七歳当時・舞台衣装姿）の油絵の肖像画が掛かっている。

隅には地下室らしく大工道具やロープ等が転がっている。

後方の棚にはカセットデッキがある。

上手にこの地下室の唯一の出入り口である鉄の扉がある。

*

*

*

暗い舞台。

上手の鉄の扉がギィ〜と音をたてて開き、火の灯った燭台を持った黒装束の秋が入って来る。

舞台中央に立って宙を見つめて語り始める。

秋

「先生……先生、覚えてますか？ 私、秋です。早いもので、先生が死んじゃってからもう10年も経つんですよ。実は今日ね、あ頃の5人組がここに集まるんです。皆も10年経って今じゃあ頃の先生と同じ位の歳になったのよ。ふふ、懐かしいでしょ。正ちゃんに誠、マーちゃん、それから冴子も、私も10年振りに皆が集まるからすごく今日が楽しみだった……先生、10年前に死んじゃった時、悔しかったでしょ、皆のその後の人生が見られなくて、残念だったでしょ、今日は私が先生に皆を会わせてあげるからね。それから、先生の言いたかった皆への言葉も、私が代わりに伝えてあげるからね、皆が集まるまでもう少し待ってて下さいね……私の大好きだった吉夫先生……」

秋は部屋の電気を点けるとテーブルの上に燭台を置き、ろうそくの火を吹き消す。

黒服を脱いでたたんで燭台と一緒に棚へしまう。

勝の声 「こんにちはあー、こんにちはあー、梨明さーん。秋ーど
こだっぺーっ！」

上手の半開きの扉から上を覗く秋。

秋 「勝ーこっちよー、降りてきてー」

階段を降りて来る音がして、シャンペンやお菓子の
入った袋やクラッカーを抱えた勝がはいつて来る。

勝 「いやーしかしいつ来ても広い屋敷だっぺなーこんな地下
室まであったとは知らなかったっぺー」

秋 「久しぶりだねー」

と言って勝から紙袋や瓶等を受け取る。

勝 「あ、サンキュ。秋、元気だったか？」

秋 「うん、マーちゃんも元気そうだね」

勝 「ああ、オレは鍛えてっからな。今日は家の人は誰も居ら
んのか？」

秋 「うん、今旅行行ってんの」

と言って秋は受け取った紙袋や瓶をテーブルに置く。

勝 「何処へ？」

秋 「ギリシヤよ」

勝 「へえー召使いも連れてか？」

秋 「バカね、召使いじゃなくてお手伝いさん」

勝 「ふーん。そいで誠は来たか誠は？」

秋 「それがまだなのよ」

勝 「そっか、本当にあいつ来るんだろうなあ」
秋 「うん、こないだ会った時は絶対に行くって言ってたから」
勝 「そっか」

と二人は紙袋からお菓子を出したりシャンペンの瓶
やグラスをテーブルに並べたりする。

勝 「しっかしまさか正次と冴子が結婚することになるとは思
わんかったべなあ」
秋 「ほーんと、意外だったよねえ」
勝 「冴子は男子の間でアイドルだったもんなあ」
秋 「可愛かったよねえ、女の私が見ても可愛いなって思った
もんねえ、あの頃の冴子は」
勝 「お前あんまり冴子ばかり持てるから焼きモチやいてた
んじゃねえか？」
秋 「妬いてたよお」

勝 「やっぱりなあ」
秋 「でもさあ」
勝 「へっ？」

秋 「本当に冴子が正ちゃんと結婚するとは夢にも思わなかつ
たよね、マーちゃんはあの2人が付き合ってたの知って
た？」

勝 「いんやー全然知らんかったっぺ、ついこないだまで冴子
は別の男と付き合ってたでねーか、一体いつの間に正次
とそういうことになったのか、皆目見当もつかねえ」

秋 「本当だね、昔は私も親友だったからあの娘のことは何で
も知ってたけど、大人になってそれぞれに仕事とか持っ
ちやうともう駄目よね、気が付くと考え方まで昔と違っ
ちやったりしててねえ」

勝 「そっかあ、冴子はそのなに変わってしまったのか？」
秋 「いや、変わってはいないと思うけど、ほら、歳取れば嫌
でも色々と考えなくちゃならないことも出て来るじゃな

い

「結婚とかか？」

「うん」

「お前はどのなのよ」

「えっ？」

「秋はまだ結婚とか考えてねえのか？」

「まあ、考えてくはないけどさ、自分こそどのなのよ」

「いや、オレはオナニーが好きだから」

「（笑い）バカなこと言わないでよ」

間。

「オレとどうだ秋」

「えっ？」

「どうだ？」

「どうって何がよ」

「いや、だから、その、結婚……」

「えっ？……」

「いつ、いやな……正次と冴子もまとまることだし、この際オレ達もまとまんねえかなと思って」

「何よそれ、ちょっとあんた勝手にまとめないでくれる？」

「ダメかなあーオレとお前でいいと思うんだけどもなあー」

「……マーちゃんそれ本気で言ってるの？」

「ああ」

「嘘、からかったら怒るわよ」

「いんやあ、決してオレはからかってなんかいいねえ、本当に本気だ」

「私と結婚したいって言うの？」

「ああ」

「……へえーえ、びっくりした」

階段を誰かが降りて来る音がする。

勝 「あつ、誰か来たべ、誠でねーか？」

半開きの扉から上を覗く秋。

秋 「違う、正次と冴子だよ」

勝 「えっ、何だ、どうすっぺ」

秋 「もうしょうがないよ、こうなったら2人でクラッカー鳴らそ、いいマーちゃん、打ち合わせ通りにやってよ」

勝 「うん、分かってる」

扉の前に立ってクラッカーを構える二人。

扉を開けて腕を組んだ正次と冴子が入ってくる。

正次はビジネススーツにアタッシュケースを持っている。

パパパンとクラッカーを鳴らす二人。

秋 「おめでとー！」

勝 「おめでとー！」

冴子 「わーありがとうー」

秋 「冴子おー」

冴子 「秋いー」

冴子と秋はワーワー言いながら抱き合う。

勝 「（歌う）はーなー嫁はあー夜汽車あーに乗ってえー」

秋 「バカ、古いわよあんた」

勝 「そっがあ、しっかり良かったなあ二人とも」

正次 「ああ、どうもありがとう（ニコニコ）」

秋 「おめでとー冴子」

冴子 「うん（ニコニコ）」

正次 「あれ、誠は？」

秋 「それがまだなのよ」

勝 「遅いっぺなあー」

正次 「お前、噂には聞いてたけど、本当に訛っちゃったなあ」

勝 「そうダベか、ダハハハハハ……」

冴子 「アハハハハ……やだマーちゃん」

正次 「お前まだ2年くらいだろ、あっちに行っ、なんでまたそんなに染まっちゃったんだよ」

勝 「いやあ、一生懸命仕事してたらいつの間にか、こうなっちゃったんだあ」

正次 「ふっ、まあお前らしいよな」

勝 「やっぱり茨城訛りのデカッーのは流行んねえかなあ、いやーオレも晴れて念願の警察官になれたのは良かったけど、まさか茨城県警に配属されるとは思わなかったっぺ」

と言いながら勝はなんとはなしに手錠を出してクルクル回してみたりする。

秋 「だってあんた自分で希望出したんじゃないの？」

勝 「茨城は第二希望だ、第一希望は本庁だったんだあ」

冴子 「でもマーちゃん、昔からの夢が叶って刑事になれたんだからいいじゃない、ねえ」

秋 「そうだよ」

冴子 「だけどさー、刑事役をやりたいからってミュージカル研究部に入って来るなんて、やっぱりマーちゃん変わってたよねえ」

勝 「そうかなあ……」

冴子 「ねえマーちゃん、ピストル持ってんの？」

勝 「ああ、まあ」

冴子 「見せてよ」

勝 「だミ」

冴子 「お願い」

勝 「だミ」

冴子「いいじゃんちよっとくらい見せてくれたってえ」

勝「だミだ、おもちゃじゃねえんだから」

冴子「ふーんだ、ケチ」

勝「(陰しい顔つきになり)もしなんか間違いでもあったら
オラの責任なんだかな」

冴子「ふんだ」

正次「だけど警察も近頃は色々あったから大変だっただろ」

勝「いや、オレは日頃から身体さ鍛えてっから、何があってもへーっっちゃらさあ」

正次「へえーえ。それで秋の方はどうなんだよ、学校の方は？」

我等が母校の方は」

秋「うん、どうって相変わらずよ」

正次「思い出すなあ、もう10年かあ。今じゃそこで秋が教える立場にいるんだもんなあ」

冴子「不思議よねえ」

正次「それでどう？ 最近の高校生達ってのは、やっぱりオレ

達の頃とはだいぶ違うの？」

秋「変わんないねー。でも私たちがいた頃よりはさあ、なんか屈折してると言うか、へんに生意気かもしれなないね」

正次「悪いの？」

秋「悪いよー(笑い)私なんか陰で生徒になんて呼ばれてると思う？」

正次「うーんとねえ……分かった、オールドブス！」

秋「ピンポーン！ と言いたいけどちよっと違うな」

勝「そんじゃあなあ、ミス・フラストレーション！」

秋「惜しい！ 正解はね、ヒス・テリー」

冴子「ひどーい！」

勝「へえーえ、何でまた？」

秋「うん、生徒達に言わせるとね、自分達を欲求不満の捌け口にしてるんだって」

冴子「秋にそんなひどいアダ名付けるなんて信じらんない」

正次「だけど今思えばオレ達も先生に結構ひどいアダ名付けて

たじゃんか、なあ」

秋 「ゾンビとかね」

勝 「あーあー、いたいた、それ誰だっけえ」

冴子 「数学だよ、ほら折本とかって」

勝 「そうそう」

秋 「まあ教師なんてのはさ、昔から生徒にバカにされるものだったのが相場だからねえ」

勝 「その点やっぱり吉夫先生は凄かったべなあ」

正次 「皆に尊敬されてたもんなあ」

勝 「本当だよなあ、あの先生がいなかったら今もオレ達こうして集まってねえもんなあ」

秋 「そうだよねえ、何よりも私達の為にミュージカル研究部作ってくれたんだもんねえ」

正次 「そうだな……」

秋 「私もねえ、自分が教師になって母校に戻って来てさ、また昔みたいミュージカル研究部作ってやろうって思っ

たの、でもダメ、話に乗って来た生徒は何人かいたんだけど、他の先生達が皆話にならないの。新しくクラブを作るのには、職員会議に掛けて3分の2以上の賛成が必要なんだけど、皆頭固くってねえ、全然賛成してもらえなかった……なんだかんだ言ってもまだ進学校の体質は昔と変わってないのよ」

勝 「ふーん、やっぱり吉夫先生は凄かったんだべなあ」

秋 「そうだよ。あの頃の先生達なんか今の人よかよっぽど頭固かった筈だよねえ、それを皆説得しちゃったんだから。やっぱり私なんか真似できないよ」

正次 「あれっ！ これ吉夫先生が描いたんじゃないの？」

と壁に掛かっている冴子の肖像画を指す。

秋 「そうだよ」

冴子 「（見て）やだあ」

勝 「あっ本当だあ、さすがに良く描けてんなあ」

秋 「私卒業する時先生の遺族に無理言って、形見にってもらったの」

正次 「先生絵の勉強しにフランスに行くって言ってたもんなあ」

勝 「きれいだあー、あの頃の冴子そのまんまだあ……」

正次 「会いたいなあ、吉夫先生に」

冴子 「うん……」

しばし見惚れる正次と勝。

冴子も見ている。

秋 「ねえ、もう誠が来るの待ってたら遅くなっちゃうからさ

あ、始めちゃおうよ」

正次 「あっ、ああ、そうだね、でも今日あいつ本当に来るんだろ
うな、今日はオレあいつと会うの楽しみにして来たんだから、
いろいろとブロードウェイのことも聞きたいし」

秋 「うん、大丈夫だと思う。絶対行くって言ってたから」

正次 「秋は会ったんだろ、あいつがこっちに帰って来てから」

秋 「うん」

正次 「どんな感じだったの」

秋 「うん、なんか無精髭はやしちゃって、だいぶやつれちゃ
っててねえ、前と比べて随分感じ変わった」

勝 「そうかあ、きつと向こうで苦労さしてたんだべなあ」

秋 「うん、何しろ10年振りだからねえ。やっぱりさあ、もう
皆今年は30歳だし、今になって日本に帰って来たってことは
さあ、誠も人生考え直してみる気になったのか
もしれないねえ」

勝 「そんな、そんなこと言うなや、例え向こうでダメで帰っ
て来たって、こっちでまた頑張ればいいっぺや」

秋 「うん、それはそうだけど」

正次 「まあ現実はその甘くはなかったってことかな、ましてや
本場のブロードウェイだろ」

勝

「そんな、お前等友達だろ、そんな冷たいこと言うなよ。オレあいつは凄いつて思ったもの、だってあいつ、高校卒業してすぐ一人でブロードウェイに行っただろ、こいつは凄いつて思ったもの。だってあいつただけだろ、高校時代の皆の夢捨てずに頑張ってるのは、オレずっと思ってたもの、いつかきつと、夢を叶えて帰って来て欲しいつて」

秋

「もうダメだったのかもしれないよね」

勝 「秋」

正次

「まあいいじゃないかよ、な、とにかくさあ、オレ達が誠を含めて皆集まるのは10年振りなんだからさあ、今日は誠が来たら皆で無事な再会を祝ってやろうよ、なあ」

秋

「そうだね」

勝

「よし、じゃあ取りあえず皆乾杯すつぺや」

正次 「ああ」

勝と秋は正次と冴子にグラスを渡し、シャンペンの栓を抜いて注ぐ。

勝

「そんなじゃ、この度めでたくゴールインした、我等の仲間、

正次と冴子の幸せを願って！」

正次 「ダサイよお前」

秋

「今日は内祝いだね、本番は来月だもんね、お腹がまだそんなに目立たなきゃいいけど」

と冴子のお腹を触る。

冴子 「ねえー」

と顔を見合わせて笑う

勝

「そんなじゃあ、乾杯っ！」

一同「カンパニー！」

グラスを合わせる四人。

カセットのスイッチを入れる秋。

流れ出す11年前の誠と冴子の歌声。

”シエルブルーの雨傘”である。

冴子「ウッソー！ やめてよ恥かしい」

秋 「懐かしいでしょうー」

冴子「恥かしいよー」

正次「でもなんか、あの頃のこと思い出すね」

冴子「嫌だあ、誰が持ってたのよこんなテープ」

誠の声「オレだよ！」

半開きの扉を開けて誠が入って来る。

途端に表情を強張らせる冴子。

見つめ合う二人、だが他の者は二人の様子に気付かない。
流れ続けているテープ。

勝 「誠ー！ よく戻って来たなお前」

正次「元氣だったかよお前」

勝 「うわー10年振りだっぺ10年振り、お前だけは本当に
クラス会にも来ねえんだからなあ」

正次「本当だよ」

誠 「どうだ、変わったか？」

勝 「んにゃ、何も変わっちゃいねえ、何があっても誠は誠だ、
うっれしーなー」

抱き合って喜ぶ二人。

ふと誠、改まって。

誠 「そうだ、正次、結婚おめでとう」

正次 「うん」

誠 「冴子もおめでとう」

冴子 「(頷く)……」

見つめ合う二人。

勝 「誠、今まで何やってたんだ〜遅かったんじゃないの〜」

誠 「ごめん、久し振りだったから道に迷っちゃってさ」

秋 「皆心配してたんだよねえ〜」

勝 「おーし、これで全員揃ったところでもう一度乾杯えし直
すべ。ホラ誠！」

と誠にグラスを渡してシャンペンを注ぐ。

勝 「お〜感激だなく。んだば、実に10年振りにして再会し

た、我等心の友たちの為に」

とグラスを上げる。

誠 「相変わらずだなお前」

勝 「カンパ〜イ！」

一 同 「カンパ〜イ！」

グラスを合わせる。

グラスを置いて拍手する一同。

カセットデッキのスイッチを切る秋。

勝 「懐かし〜な〜もう、吉夫先生も今頃は草場の陰で懐かし

んでっぺ、きつとなあ」

誠 「そうだな」

勝 「それで誠、どうだったっぺブロードウェイは」

誠 「うん……すごかったよ……」

問。

正次 「何がだよ」

誠 「うん……何て言うかな、やっぱり空気が違うんだよ、全然。何か目指すものがあって頑張ってる連中ってのはさ、金なんか無くてハツラツと生きてるっていうか、そういう奴らと友達になれたことが一番、オレがブロードウェイに行って良かったって思うことかな。皆お互い競ったり、勇気づけあったりして頑張ってた」

正次 「いいなあ、オレも憧れるよそういうの。オレなんか毎日セコセコかけずり回って営業営業営業だからな」

勝 「ホント、誠だけだもんな、昔の皆の夢さ捨てずに頑張ってるのは」

秋 「ところで正ちゃん、あんた何で今日はそんなカッコ（ス

ーツにアタツシケース）で来たの」

正次 「ごめん、オレ今日仕事入っちゃってたんだ、これからまたすぐ行かなきゃならないんだ」

秋 「えーっ」

正次 「ごめん。それがさー、今うちで一番大手の取引先が他の銀行に取られそうなんだよ。これ持ってかれると支店の存続に関わる大ピンチでさア、今日オレ絶対行って思い留まってもらわないと首が飛ぶんだ、今日が最後のチャンスだから」

勝 「それはえらいことだべなあ、んならもう早く行った方がいいんでねえのか」

正次 「でも皆せっかく集まってくれたんだし、1時間くらいならここにいられるから」

勝 「なんしろ次期副支店長候補だもんなア」

秋 「カワイイ奥さんももらったし、人生登り坂だね」

正次 「まあ胃が痛いことも多いけどね、皆のおかげで何とか頑

張ってるよ」

勝 「そんなや皆揃ったことだし、正次も1時間くれえならいられるつつうことだから、一応予定通りにいくとすつか」

と皆の顔を見回す。

秋 「そうだね（微笑）」

冴子 「ところでさア」

秋 「えっ」

冴子 「ひとつ聞いていい？ 何でこんな地下室なの」

勝 「よくぞ聞いて下さいました。実は今日は特別な趣向があるのです」

冴子 「何」

勝 「驚くなかれ秋はここ数年のうちに修行を積んで、驚くべき力を身に付けたのです」

冴子 「何？ 驚くべき力って」

勝 「それは交霊術です」

冴子 「交霊術？」

勝 「さよう。即ち死者の霊を自分の身体に降ろして霊と話をすることが出来るというあれです」

冴子 「えーウソオそんなこと出来んの」

秋 「（頷く）」

冴子 「ウソだアーどうすんのそれで」

勝 「さっき吉夫先生に会いたって言ってたべな」

冴子 「！ えーやめようよそんなこと」

秋 「何でよ、吉夫先生にもあなた達の結婚祝ってもらいたいでしょ」

冴子 「それはそうだけどき、何だか怖いよ、本当に出来るのそんなこと」

秋 「出来るわよ、その為に今日までお寺に通って修行積んで来たんだから」

正次 「いいじゃない、面白そうだなア、やってみようよ、なア」

誠 「うん（笑う）」
勝 「ようし、そんなら準備すつぺ」

秋は下手へ行き、黒装束を羽織る。
勝は燭台を持って来てテーブルに立て、ろうそくに
火を灯す。

正次 「（秋を見て）おう、雰囲気出てるね」

勝 「んじゃ、皆席に着いてくれや」

一同は秋を中心にして椅子に座る。

秋 「皆いいわね、真面目に祈らなきゃダメよ」

誠 「うん」

正次 「ああ」

秋 「それじゃ皆手をつないで。マーちゃん電気消してくれる」

勝 「あ、ああ」

と立ち、扉の脇のスイッチを切る。
部屋は暗くなり、ろうそくの明りだけになる。

冴子 「えーやっぱりやめようよ、私何だか怖いよ」

正次 「大丈夫だよ、何も悪霊呼ぶ訳じゃないんだから、吉夫先生
の霊なんだからさ」

席に戻った勝も皆と手をつなぐ。

秋 「それじゃいい皆、皆心から吉夫先生に会いたいと願わな
ければダメよ」

勝 「うん」

急に不気味な様相になった秋は、妖術使いが呪文を

唱える様に目を閉じて、宙に向かって語りかけ始める。

秋 「天にまします我等が父よ、今ここに集いし、我等5人の恩師である、平成〇年〇月〇日、丘風高校、校舎屋上より誤って転落死したる、夏吉夫、享年29歳の霊を、今ここに招き、我等と会わしめ給え……」

と言って秋は深く頭を下げる。

秋 「それじゃ皆私の言う通りに呪文を繰り返してね……エロエムエツサイム」
勝 「(吹き出す)」
秋 「真面目にやんなさい！」
勝 「はいっ」
秋 「エロエムエツサイム」

— 同 「エロエムエツサイム」
秋 「エコエコアザラク」
— 同 「エコエコアザラク」
秋 「アブラカタブラ」
— 同 「アブラカタブラ」
秋 「じゅげむじゅげむ」
— 同 「じゅげむじゅげむ」
秋 「あのくたらさんみやくさんぼだい！」
— 同 「あのくたらさんみやくさんぼだい！」
秋 「(叫ぶ) アーッ！」

落雷の様な衝撃音と同時にろうそくが消える。

冴子「キャーッ！」
正次「おい、ろうそくをつけれ」

ライターを点ける音がしてろうそくに火を灯す勝。
燭台を持って行き、電気のスイッチを入れる。
明るくなる室内。
秋だけがまだうつむいている。

勝 「おい秋、秋、大丈夫か」
誠 「秋！」

むくつと顔を上げる秋。
秋の顔に青い照明が当たっている。
無表情に辺りを見回す。
固唾を呑んでいる一同。

*ここからの秋は吉夫の霊が乗り移ったらしく、野
太い声でハツラツと喋りまくる。例えば生きの良い
柳葉敏郎の様である。

秋 「(吉夫) よーしじゃあ今日はシーン8の二人の別れの場
面からだな。何やってるホラ、誠、冴子、用意しろよ。
勝！ テープ回して、正次、台本持って来い！」

立ち上がる秋(吉夫)。
きよとんとする一同。

秋 「(吉夫) 何やってるホラ、本番までにもう何日も無いん
だぞ！ そんなんで出来るのかお前ら、ホラ！ さっさと
しろ！」

仕方なく皆立つ。

秋 「(吉夫) ホラ、冴子はここ、誠はこっち」

と冴子と誠を向かい合わせの立ち位置に着かせる。

秋 「(吉夫) 正次! 台本は」
正次 「は、はい」

と正次は棚から何かの本を持って来て秋(吉夫)に渡す。

秋 「(吉夫) 勝、テープ回せ!」
勝 「へ、へい」

とテープデッキのスイッチを入れる。
流れ出す”シェルブールの雨傘”のメロディ。

秋 「(吉夫) いいか、ここはニーノとカトリーヌの最後の思い出になるシーンだからな、気持ちを込めて本気で歌え

よ。はいっ」

メロディに合わせて歌い出す誠と冴子。
誠と冴子が歌う間、秋(吉夫)は二人の側に立って演出する。

冴子 ♪ あなたのその微笑みは
私の胸の奥から
すべてのことを包むの
その為に生きてる」

誠 ♪ きみのことを思う時
僕の心は憂える
きみが幸せでいると

願ってるいつでも」

冴子「(カトリーヌ) 嫌よニーノ、そんなこと言っちゃ」

誠 「(ニーノ) えっ? 何がだいカトリーヌ」

冴子「(カトリーヌ) だってあなた、私の幸せを願ってるなんて、まるであなたが私を置いて何処かへ行ってしまおうみたい」

誠 「(ニーノ) ……いや、僕はなんだかキミといると幸せ過ぎて、時々これは夢なんじゃないかって、怖くなる時があるんだ」

冴子「(カトリーヌ) ……(見つめて) 私もよ」

秋 「(吉夫) はい、そこでカトリーヌは狂おしくニーノにすがりつく!」

冴子、動かない。

秋 「(吉夫) 何やってる、はい! すがりつく!」

と冴子を押して誠にくっつける。

秋 「(夫) はいそしてニーノは優しくカトリーヌの肩を抱くっ!」

と誠の両腕を冴子の肩に乗せる。

秋 「(吉夫) はいニーノ、セリフっ」

誠 「(ニーノ) ……」

秋 「(吉夫) どうした! セリフっ!」

誠 「(ニーノ) 離さないよ、僕はキミが好きだ、生まれてから人をこんなに好きになったことは初めてだよ」

冴子「(カトリーヌ) ニーノ」

堅く抱き合う二人。

秋 「(吉夫) はいそこへ意地悪なマルク登場っ！」

ドカドカと正次(マルク)が入ってくる。

正次 「(マルク) やめろお前ら！」

と言ってカトリーヌをニーノから引き離す。

秋 「(吉夫) おっ、いいね正次、感じ出てるぞ」

冴子 「(カトリーヌ) お父さん！」

誠 「(ニーノ) お父さん、僕たちは何も……」

正次 「(マルク) うるさい黙れ！」

と言ってニーノを突き飛ばす。

冴子 「(カトリーヌ) 父さん、何でいけないの？ 何で私と二

ーノが好き合っつてはいけないの？」

正次 「(マルク) お前の為にならないんだ」

冴子 「(カトリーヌ) どうしてよう」

正次 「(マルク) ……それはなあ……」

そこへ勝(ミッシェル)が駆け込んで来る。

勝 「(ミッシェル) ニーノ！」

誠 「(ニーノ) ミッシェル」

勝 「(ミッシェル) 大変だべニーノ」

秋 「(吉夫) ちょっと待てよおい！」

勝 「(ミッシェル)？」

と止まる。

勝 「なんだべ？」

秋 「(吉夫) なんだよそのダベってのは、なあ」

勝 「これだべか？」

秋 「(吉夫) おかしーだろうフランスの田舎町の話なのにダ
べなんて茨城弁で喋っちゃあ」

勝 「いやあ、そんなこと言っても……」

秋 「(吉夫) いつからお前そんな訛る様になったんだよ」

勝 「いつからつっても、2年ほど前から」

秋 「(吉夫) 何い？ 2年前から？ 聞いてないぞオレはそ
んな話」

勝 「そりゃあそうだっぺ、あんなあ先生、実はな……」

秋 「(吉夫) もういいよ、言い訳なんか、いーからもう一度
やれよ、ホラ」

元の場所へ戻る勝。

そしてまた入って来る。

勝 「(ミッシェル) ニーノ！ (硬い)」

誠 「(ニーノ) ミッシェル」

勝 「(ミッシェル) 大変だよニーノ」

秋 「(吉夫) くさいなあ……」

ミッシェルはマルクとカトリーヌを見て立ち止まる。

勝 「(ミッシェル) あ、父さん……それに姉さんも」

正次 「(マルク) どうしたんだミッシェル」

勝 「(ミッシェル) いや、それが」

冴子 「(カトリーヌ) 何なの？」

勝 「(ミッシェル) 来たんだ」

冴子 「(カトリーヌ) 何が？」

勝 「(ミッシェル) ニーノに、召集令状が」

誠 「(ニーノ) えっ!」

勝 「(ミッシェル) さっき学校の帰りにニーノの家のそばを通りかかったら、ニーノのお母さんがニーノを捜して、どうしたのって聞いたたら、そしたら……来たんだって……ニーノ宛に、召集令状が」

誠 「(ニーノ) ……!?!」

正次 「(マルク) やっぱり」

冴子 「(カトリーヌ) ……ニーノは戦争に行くの……?」

正次 「(マルク) だから言ったんだ、カトリーヌ。この男を愛してはいけない、この男はお前を幸せには出来ないんだよ」

冴子 「(カトリーヌ) ニーノ!」

誠 「(ニーノ) カトリーヌ」

正次 「(マルク) カトリーヌ、酷なようだがニーノのことは忘れるんだ、今戦争へ行けば恐らく二度とは帰って来れな

い」

冴子 「(カトリーヌ) 嫌だわそんなの!」

勝 「(ミッシェル) 嫌でもこれだけは仕方がないよ、今は皆がお国の為に命を懸けて戦ってるんだから、いくら姉さんの為だからってニーノだけが戦争に行かないって訳にはいかないよ」

冴子 「(カトリーヌ) そんな、嫌よ、絶対に嫌よ、ねえ、行かないでニーノ」

誠 「(ニーノ) ……」

正次 「(マルク) ニーノ、君には分かるね、君にはカトリーヌを幸せにはしてやれないのだということが」

誠 「(ニーノ) ……はい」

冴子 「(カトリーヌ) ! そんな、ニーノ、私を好きじゃないの? 私を放っておいて平気なの? ねえ、答えてよニーノ!」

誠 「(ニーノ) 平気な訳がないだろう!」

冴子「(カトリーヌ)……」

秋「(吉夫)音楽っ！」

勝がカセットのスイッチを押すと”シエルブルーの
雨傘”のピアノが流れ出す。

秋「(吉夫)さあ最後の別れだ、目と目を見つめて！心の
限りに歌え！」

誠 ♪ きみを残して行くこと

僕の胸は張り裂ける

泣かないできみはいつも

ここにいて心に

冴子 ♪ あなたが今離れてく

呼んでももう帰らない

私はここでこのまま

いつまでも待ってる

秋「(吉夫)よし、もっともっと気持ちを込めて、別れる
悲しさを味わえ、もう二度と会えないんだぞ！ ニーノ
は戦争で死ぬかもしれないんだぞ！ 胸が張り裂けんば
かりに歌え、叫べ、それ！ もっと！」

歌っているうちに感極まって涙する冴子。
曲が終わる。

秋「(吉夫)よしっ！ 良かった、いいぞ、最高だ！」

と拍手する。
皆も拍手する。
涙を拭いている冴子。

秋 「(吉夫) あーっはっはっはっはっ、なっつかしーなあテ
メエら、えっ、おい、よくぞオレを呼んでくれたなー嬉
しいぞー」

正次 「吉夫先生……」

勝 「本当だ、本当に吉夫先生だっぺ！」

秋 「(吉夫) 良く覚えてっぞーお前らのこと、何せオレの最
後の生徒だかんなお前らは。正次に誠、それに勝と冴子
だ、なーっはっはっはっ……」

「変わんないねえ先生」

秋 「(吉夫) 当たり前だ、オレはもう死んでから永遠に歳
取らねえんだ」

「いいやなアー」

秋 「(吉夫) それよりお前、もう1人はどうした、秋はいね
えのか？」

「バツカだな先生、先生が今身体借りて喋ってんのが秋の
身体でねえか、そんなのに秋に会える訳がなかんべー」

秋 「(吉夫) あ、そっか、ははははは……あいつも元気か？」
「元気ですよ」

「(吉夫) そっか、そりや良かった。でお前ら、幾つにな
ったんだ」

「29です」

秋 「(吉夫) へーえ、オレと同年か。早いもんだな、へへ、
お前らもいとおじさんおばさんになりくさりやがって、
ハハ、懐かしいなア」

「実はな先生」

「(吉夫) ん？」

勝 「今日先生に出て来てもらったのは他でもねえんだけどな。
実はな、正次と冴子がこの度めでたく結婚することにな

ったもんでな」

秋 「(吉夫) そーか！ そうだったのか、そうか。そりゃあ良かったなア」

正次 「ありがとうございます」

冴子 「先生」

大きく見開かれた瞳で秋をじっと見つめる冴子。

冴子 「本当に吉夫先生なの？」

秋 「(吉夫) ああ、真正正銘の夏吉夫だ。冴子……元氣だったか」

冴子 「先生(泣く) あたしね、安井君と結婚することになりました」

秋 「(吉夫) 今聞いたよ、良かったなあ」

冴子 「先生、高校時代は本当にありがとうございます」

秋 「(吉夫) 泣くなよ」

冴子の肩を抱いてやる秋(吉夫)。

冴子 「だって先生何のお礼も言う間もなく死んじゃったんだもん」

秋 「(吉夫) そうだなー。びっくりしたなあオレも」

誠 「だけど先生さー、こう言っちゃなんだけど屋上のアンテナ直してて落っこちるなんて、ホントまぬけな死に方したもんだよなアー」

秋 「(吉夫) ホントだよなくカッコつかねえよなアあれじゃあ」

誠 「ま、オレは前からドジな人だなあとは思ってたけどね」

秋 「(吉夫) 何だとお前、死者の霊を冒とくするつもりか」

一同 「(爆笑)」

急に黙り込む秋(吉夫)。

誠 「先生。先生どうしたの」

頭を押さえて苦しみだす秋（吉夫）。

秋 「（吉夫）うーっ、うっうっ……」

勝 「どうしたんだっぺ先生」

秋 「（吉夫）うっうっ、うぎゃああーっ！」

倒れ、呻きながらのたうち回る。

冴子「キヤーツ」

秋 「（吉夫）うぐーっ、くっ苦しいっ、た、助けてくでえっ
っ、ううっっ」

正次「秋、どうした！ 秋、しっかりしろっ」

と秋を抱き起こす正次。

正次「おい、秋っ」

秋 「（吉夫）うぎゃあー！ おあーっ！」

急にガクッと気を失った様に静かになる。

勝 「おい秋……どうしたんだ……」

秋の身体を揺さぶる勝。

スッと身を起こした秋は、それまでとは打って変わって不気味な程に淡々と喋り始める。

秋 「（吉夫）すまない……」

正次「えっ？」

秋 「（吉夫）すまない皆」

勝 「何がや」

秋 「(吉夫) オレ皆にな、謝らなきゃあならないことがあるんだ」

勝 「何ね」

秋 「(吉夫) オレ、実はな、本当はな、あの時足を滑らせて落ちた訳じゃないんだ」

正次 「えっ」

秋 「(吉夫) あれは……事故じゃないんだ。オレが死んだのは、誤って落ちたんじゃないんだ」

正次 「何言い出すんだよ」

誠 「どういうことだよ」

秋 「(吉夫) 自分で、飛び降りたんだ。自殺したんだ」

冴子 「嘘よそんなこと」

秋 「(吉夫) ごめんな、皆」

冴子 「嘘よ、何だよ」

秋 「(吉夫) 冴子、お前は知ってるだろう」

冴子 「嘘だ、やめてよ先生そんな話、お願いだから」

正次 「どうしたんだよ秋、急に何言い出すんだよ」

秋 「(吉夫、絶叫する) オレは冴子が好きだったんだあ、心底愛してたんだぞお前のことをー！」

冴子 「いやあーっ！」

正次 「何言ってるんだよ、おい秋！」

誠 「こんな話になるなんてオレは聞いてないぞ」

勝 「んだ、こんな筈じゃなかったっぺ」

冴子 「何よ、どういうことなのよ」

正次 「ごめん冴子、皆でお前のことかつこうとしてたんだ」

冴子 「ええっ？」

誠 「打ち合わせしてたんだよ、全部秋の芝居なんだよ。でオレ達も調子合わせてたんだ」

冴子 「そんな、マーちゃんも？」

勝 「う、うん、ごめん。でも先生が自殺したなんて話になる筈じゃなかったっぺ」

秋 「(吉夫) 冴子、冴子、オレはお前が好きだ、愛してる」

よくこっちへ来てくれー！」

と冴子に抱きかかっている。

冴子「キヤーツ！」

正次「おい、やめろよ秋、どうしたんだよ」

誠「秋！」

秋を捕まえる正次と誠。

暴れる秋、揉み合う三人。

呆然とする勝。

正次「おい勝、お前ポケットとしてないで手伝えよ」

勝「あっ、ああ、どうすっぺ」

正次「どうしようだったってしようがないだろう、取り敢えずそ
うだ、椅子に縛り付けよう」

勝「ええっ、そんな」

正次「だって、しようがないだろうこのままじゃ。その辺にロ
ープがあっただろ」

秋「（吉夫）放せっ、放せこのヤロー、テメエら恩師に向か
って何しやがんだよーこの恥しらずっ、オレは冴子と一
緒に生きていきたかった、冴子にオレの気持ちを受け入
れてもらえないと分かって生きていけなくなったんだ。
冴子、冴子……」

勝は隅からロープを持って来て、誠と正次が強引に
座らせた秋を椅子に縛り付けていく。

秋「（吉夫）放せ、放せこのヤロー」

誠「どういう事なんだよこれは、本当にお前どうしちゃった
んだよ秋！」

勝「待てよ、こりはもしかしたら本当に吉夫先生の霊が来て

んのかもしんねえぞ」

誠 「何？」

正次 「バカなこと言うなよ」

勝 「オレ知ってたんだ。警察学校で同期だった奴が多摩警察に
いるんだけど、吉夫先生が死んだ時の調査調べてもら
ったことあんだ。そしたらな、実はな、先生が屋上から
落っこって死んだ前日に吉夫先生、校長先生に宛てて
内密に辞表を渡してたんだ」

誠 「何だって？ ホントなのかよそれは」

勝 「しかもそれにはこう書いてあったんだ。道ならぬ恋をし
てしまいました。僕は旅に出ることにします、って」

椅子に縛られてもがく秋は次第に妖怪じみた形相に
なってくる。

秋 「（吉夫）冴子くサエコくオレハホントウニオマエヲアイ

シテイタンダヨおくおく」

冴子 「やめてー（耳を押さえて叫ぶ）やめてー先生嘘だよ、そ
んなの違うお願いもうやめてー！」

正次 「いい加減に芝居するのはやめろよ秋！ お前こんな事し
て何が面白いんだよ！」

勝 「芝居じゃないかもしんないべや」

正次 「いや芝居だよ、芝居に決まってるよ」

勝 「なしてそう言い切れる」

正次 「お前達グルになってるんじゃないのか」

勝 「バカなこと言うなや」

秋 「（吉夫）ガーツハハハハハおい正次」

ここからの秋（吉夫）はエクソシストのリーガンの
様に、悪魔じみた形相になる。

秋 「（吉夫）悪いけどな、冴子はお前が思ってる程純真な女

なんかじゃねえんだぞ」

正次「何がだよ」

秋「（吉夫）お前誠と冴子のことは知ってるのか」

誠「やめろよバカ野郎！」

正次「何の話だよ」

秋「（吉夫）あの頃放課後部室で毎日のようにこいつらが二人で何やってたか知らねえのか」

誠「やめろよこの野郎！！」

正次「何だよ」

秋「（吉夫）ばーかセックスに決まってんじゃねえか」

冴子「嘘だよそんなこと」

正次「……」

秋「（吉夫）バカだなお前は、知らなかったのか」

冴子「嘘だよそんなの違うもん」

誠「何でそんなこと言うんだよ！ アンタ本当に先生なのか！ 先生ならそんなことここで言う訳ねえよ」

秋「（吉夫）ガアーツハツハツハハハ悪かったなア、オレはお前らが思ってる様な人間じゃねえぞ。と言うよりもな

ア、お前らオレを何だと思ってるんだ、オレは神様でも何でもねえんだぞ。オレだって普通の男なんだよ、お前からと同じな」

正次「本当なのか冴子」

冴子「えっ？……」

正次「こいつの言ってることは本当なのかって聞いてるんだよ」

冴子「嘘だよ違うもん」

正次「本当か？」

冴子「本当だよ」

秋「（吉夫）嘘つきな女だなアお前は。よくもまアしゃあしやあと」

正次「お前に聞いてるんじゃないんだよ黙ってるよこの野郎」

秋「（吉夫）おゝ恐い、キャツハハハ……」

正次「本当だな、本当にこいつの言ってることはデタラメなん

だな」

冴子「……」

正次「えっ？ どうなんだよ」

秋「（吉夫）お前はバカなお人好しだなア、そんな女に騙されて」

秋につかみかかって行く正次を止める勝と誠。

誠「おい、正次」

正次「放せよ！ この野郎ふざけやがって！」

勝「やみろや正次」

誠「落ち着けよ正次」

正次「芝居だよ秋が芝居してんだよ！」

誠「何で分かるんだよ」

正次「こいつが適当なこと言ってるからだよ」

誠「こいつが言ってることは本当のことだよ！」

正次「！ ……」

誠「本当なんだよ」

正次「……」

秋「（吉夫）ガアッハッハッハそれみろ……」

正次「（睨みつけて）どういうことなんだよ誠」

誠「どうということって、あの頃冴子と付き合ってたんだよ。でももう今は全然関係ない。お前に隠してた訳じゃないよ、ただ言う必要が無いと思ったから言わなかっただけだ」

正次「（冴子に）何で今まで黙ってた！」

秋「（吉夫）ウククククク……あの頃の冴子は本当に若くて綺麗だったなア、今の身体とは比べものにならないくらいな、抜ける様に白くてまだ半分あどけなかった。丁度その頃だ、一番綺麗な美の絶頂の時にその身体を毎日誠は、クククク」

正次「うるさいぞ黙れこの野郎！」

秋 「(吉夫) だっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは……(よだれを垂らして笑う)」

正次 「(冴子に) 今まで何で隠してた」

誠 「だからそれは」

冴子 「だって一度も聞かれたことなかったもん」

正次 「ふざけるなー!」

冴子 「ふざけてなんかないよ」

正次 「二人してオレをバカにしゃがって」

誠 「バカになんがしてねえよ」

正次 「いやしてる! やめる、オレやめるよお前と結婚するの」

冴子 「何言い出すのよ急に」

正次 「だってそりやそうだろ、そんなこと今さら聞かされて、

これからずっと一緒になんか暮らしていけるかよ」

冴子 「何でよ」

誠 「待てよ正次、あの頃はオレ達本気で付き合ってたんだよ。

遊んでた訳じゃねえよ。あれはあれで真剣だったんだよ」

正次 「じゃあ何で別れたんだよ」

誠 「オレ卒業したら1人でブロードウェイに行くって決めて

たから、まさかこいつを連れて行く訳にもいかなかったし」

冴子 「私が行ってって言ったのよ。私の為なんかに誠に夢捨てて欲しくなかったから」

正次 「お前は黙ってる!」

誠 「今日初めてなんだよ。卒業以来、冴子と会ったの……でもこれだけは信じてくれ、オレ達本気で好き合ってたんだ」

正次 「だから許せないんじゃないかよ」

誠 「あの頃はだよ」

正次 「今もじゃないのか」

誠 「違うってだから! もう今は思い出になっちゃってるよ」

正次 「また思い出すんじゃないのか」

誠 「思い出さない」

正次「そんなこと分からないだろう」

誠「分かるよ」

正次「それじゃもう忘れたってのか」

誠「忘れたよ」

正次「嘘だ」

誠「だったらどう言やいいんだよ」

正次「どうもこうもないよ。オレはお前の尻拭いなんか御免だからな」

誠「何でそうなるんだよ」

冴子「何よ尻拭いって。あなた私のことそんな風に考えてたの？」

正次「考えてないよ今までは」

冴子「あなた私に言ったじゃない。私が過去のこと聞きたいって聞いたなら、何も聞きたくないって私に言ったじゃないよ」

正次「卑怯だよお前ら」

冴子「何だよ」

正次「一生オレに黙っとくつもりだったってのか」

冴子「そっだよ」

正次「もうダメだな」

冴子「何がダメなのよ」

正次「オレとお前の事だよ」

冴子「何ですよーもう今さらそんなこと言い出さないでよお願いだから、だってもう式場も予約してあるんだよお、結納も済ませたし皆に招待状だって出しちゃったし、あと8ヶ月で赤ちゃんだって生まれるんだよお、今さらやめるなんて言い出さないでよお願いだから」

正次「マンションも買ってあるしな」

冴子「そっだよ」

正次「(力なく笑い) お前にやるよ」

冴子「えっ」

正次「お前にやるよ!」

冴子「ムチャクチャ言わないでよ」

正次「ちっくしよう（秋に）テメエこの野郎一体オレに何の恨みがあんだよ！」

秋につかみかかって行く正次を止める勝と誠。

勝「おい、ちよっとやみろや正次」

正次「お前何でこんなことすんだよ！ 言いたいことがあるなら言ってみろ！ そんなにオレ達の結婚ブチ壊したかったのかよ！」

勝「秋じゃねえべや」

正次「いいや秋だよ、オレには分かってたんだ。全部秋の芝居だよ。何でこんなことすんだよ、えっ！ 何でだよ、答えろこの野郎！」

と秋につかみかかろうとする。

正次を捕まえて必死に止める誠と勝。

勝「やみろよ、おい」

引き離される正次。

正次「分かったよ、もう好きにしろよ。オレもう帰るよ。もういたくないよこんなところ、仕事の時間だし」

正次、アタッシュケースを持って、扉へ向かう。

冴子「待ってよ」

正次「もうお前と話すことなんか無いよ」

誠「おい待てよ正次」

と正次の腕をつかむが、正次は振り払う。

正次「うるせえな放せよこの野郎」

正次、出口の扉を引くが、開かない。

何度も引いたり押ししたりするが、ビクともしない。

正次「何だよこれ、鍵がかかってんのか」

秋「(吉夫) キヤツハハハハハハハ……」

正次、つかつかと戻って来て秋の髪をつかむ。

秋「(吉夫) ヒヤアー」

勝「やめろって正次」

正次「テメエ鍵を出せ鍵を！」

誠「落ちて着けよお前」

腕をつかんだ誠に正次はつかみかかっている。

正次「ふざけんなこの野郎、友達面して祝福してるフリして、

腹ん中じゃオレのこと笑いやがって」

誠「笑ってなんかねえよ」

正次「白々しいんだよ」

誠「オレはお前の友達だと思ってるよ」

正次「じゃあオレを今すぐここから出してくれよ、早く！ 約束の時間に間に合わなかったらどうすんだよ、これがオレにどんなに重要なことか分かってんのかよ、今日行けなかったらオレは身の破滅なんだよお、お前なんかには分かんねえだろう！」

誠「何で秋が芝居してるって言い切れるんだよ」

正次はポケットから携帯電話を出し、あわただしくダイヤルする。

正次「だってこんな見え透いてるじゃないかよ。オレには分かるんだよ、こいつはオレ達のこと妬んでんだよ、自分はオールドミスで学校ではガキにバカにされてるから、人が幸せになるのが面白くないんだろう」

誠「そこまで言うことないだろう」

正次「ちくしょう、こんなところからじゃ電波が飛ぶ訳ないよ」

とポケットにしまう。

勝「んじゃよお、もし本当に秋が芝居してんだとしたら、な

んで吉夫先生が本当は事故じゃなく自殺だったっちゆうこと、秋が知ってんだよ」

正次「そんなこと、こいつは今丘風高校の教員やってるんだろう、もしかしたら辞表のこと知ってる古株の先生から聞いたのかもしれないじゃないかよ」

勝「何でそんなことが言い切れるんだあ」

正次「可能性はあるだろう」

勝と誠「……」

正次「お前達よお、今オレがどういう状況にいるか分かってるのかよ。今行けなかったらもうオレはおしまいなんだよ、分かってないんだよお前らは……」

とその場にへたり込んでしまう。

勝と誠も疲れた様に椅子に座る。

正次「あくあ、もうメチャクチャじゃないかよ何もかも……」

冴子は正次のそばへ来て寄り添う様に座り、正次の腕をつかむが、正次はその手を振り払い、冴子に背を向ける。

秋も静かになる。

勝 「なんで……なんでこんなことになったんだっぺ……せつかく皆で久し振りに集まったっつーのに、こんなことになっちまって……もう……」

誠 「……ごめんな皆。へんな時にオレが帰ってきちゃったばっかりに、こんなことになっちやって……」

勝 「お前が悪い訳じゃないべや」

誠 「オレ、何にもなれなかった。ごめんな冴子、せつかくお前がオレを行かせてくれたのに、オレは何にもなれずに帰って来たよ。オレはクズだな」

冴子 「そんなこと言わないでよ」

誠 「もう終わったよ、何もかも。お前とのことも、もう今は遠い思い出になっちやってるよ」

正次 「聞こえよがしにそんなこと言ったってオレはお前を許さないからな」

勝 「正次、何でおめーは誠の気持ちさ分からねーんだ」

正次 「分かる訳ないだろ」

間。

秋の方を見る誠。

誠 「先生……」

秋 「(吉夫)……」

誠 「……本当にあんた吉夫先生なのか？……」

秋 「(吉夫) ああ……(と頷く)」

誠 「本当に自殺したのかよ？」

秋 「(吉夫) ああ」

誠 「……オレな先生、高校卒業してすぐアメリカに行ったんだ。本場のブロードウェイで自分がどこまでやれるか確かめたくて。でもついこないだ。尻尾巻いて帰って来たよ。10年も向こうにいたけど、結局成し遂げられたことなんかひとつも無かった。もっと早く日本へ帰りたいか

ったけど、逃げるみたいで悔しくてさ、ただそれだけで頑張ってたけど、ついに諦めがついたって言うか、力尽きたって言うか、結局オレ、負け犬だった……」

秋 誠 「(吉夫)……」

秋 誠 「でも先生、自殺したなんてあんまりだよ。オレさ、高校時代ずっと先生に憧れてたんだよ。オレも大人になったら先生みたいな生き方したいって、ずっと思ってたよ」

秋 誠 「(吉夫)……」

秋 誠 「いつも明るくて、元気で、目指しているものがあるって言うか、いつも遠くを眺めてる様な目で先生は生きてたよね。オレもそうなりたくなって、思ってたんだよ。その先生が自殺だったなんて聞かされちゃ、今のこのオレはどうしたらいいんだよ……ねえ先生答えろよ」

秋 誠 「(吉夫)……」

秋 誠 「何とか言えよ、なあ、絵の勉強しにフランスに行くって言うってたじゃねえかよー！」

秋 誠 「(吉夫)……」

秋 誠 「なあ、何とか言えよ先生」

秋 誠 「(吉夫)……ごめんな誠。オレもな、負けたんだ。オレも負け犬だ。冴子にフラれたことが悲しくて耐えられなかったんだ。もちろん生きて行くことは戦うことだし、決して負けちゃいけないんだけど。オレは負けてしまったんだな。こんなこと一生口にしたくなかったし、お前にも本当は言いたくないんだけどな、人間生きてるともうホントに立ち上がれない程の絶望に直面することがあるんだと思う。絶対的な絶望と言うか、もうそれに直面したら絶対に生きていけない絶望が、人間にはあるんだ……」

いきなり正次が立ち上がる。

正次「いい加減にしろこの野郎！ もうやめろよバカ野郎！」

誠にまでそんなこと言うことないだろうが、お前は一体何考えてんだよバカヤロー！」

とすごい勢いで秋に飛びかかって行く。

勝と誠が捕まえて羽交い絞めにする。

正次「（もがいて叫ぶ）ようし分かった、もうこうなったら言
ってやる！ 何でこいつが芝居してるって言い切れるか、
こうなったらオレはもう言ってるからな！ どうせこ
のままじゃここから出られないしこのままじゃ結婚ど
ろかオレの身も破滅だからな、今言ってるから放せ、
放せ！」

放す誠と勝。

正次「（荒い息）その代わりにお前ら全員オレと約束してくれな

いか、これからオレの話すことは絶対に口外しないって。
約束してくれ、頼むから。なあ、いいか勝」

勝「ああ、いいさ」

正次「いいか誠」

誠「うん」

正次「冴子もいいか」

冴子「うん」

正次「秋、出来たらお前も約束してくれないか」

秋「（吉夫）……」

正次「それなら吉夫先生でもいいや、ね吉夫先生頼むから」

秋「（吉夫）ああ、分かったよ」

間。

正次「吉夫先生は自殺したんじゃない、もちろん事故死でもな
い、屋上のアンテナを修理してるところをオレが後ろか

ら突き落としたんだ。だから自殺したって言うこの吉夫先生の言葉は嘘なんだ、秋の芝居なんだ。オレが自分で言うんだから間違い無い」

勝 「嘘だべそんなこと」

正次 「嘘じゃないっ」

誠 「信じられないよ」

正次 「でもそれが真実だよ、分かっただろ」

誠 「無理だよそんなこといきなり言われて信じろったって、

証拠がねえじゃねえか」

正次 「おい秋、扉の鍵をよこせ！」

秋 「……」

勝 「なして先生殺したりしたんか」

正次 「それは言いたくない」

勝 「ふざけんなや、そんなことでオウらが納得するとでん思
うんか！」

正次 「……」

冴子 「嘘でしょう。ねえあなた、嘘なんでしょうそんなこと、

何でそんな嘘つくのよ、ねえ」

正次 「……」

冴子を無視して秋から鍵を取ろうとする。
止める誠と勝。

誠 「正次、信じられる様に話してくれよ」

勝 「そうや、それが本当やっちゅうんならオレらに分かる様
に説明してみろや」

正次 「……嫌だ」

誠 「それじゃ信じる訳にはいかねえよ」

正次 「……」

間。

正次「あいつがオレにこう言ったからだよ。自分の浅ましさを良く見ろって。人を好きだと言う前に、自分の下劣さに少しは気が付けて……」

冴子「どういうことよ」

正次「……」

冴子「ねえ、どういうことなのよ、ちゃんと説明してよ……ねえ」

正次「オレは知ってたんだ」

冴子「何を？」

正次「お前らのこと。お前と誠とのこと。それから、吉夫先生がお前のことを好きだったってことも……」

冴子「えっ？……じゃあ何でさっきは知らなかったなんて言ったの」

正次「……」

冴子「何でよ！」

正次「お前達のこととは知らなかったフリしようと思ってたんだ

よ、ずっと前から」

冴子「何でよ」

正次「（涙が流れる）オレのプライドが許さないからだよ」

冴子「……」

正次「笑いたきゃ笑えよ。オレはこんな男なんだよ、これがお前が結婚しようと思ってた男だよ」

冴子「何でそんなこと言うの、私のこと好きじゃないの」

正次「好きだよ、すげえ好きだよ、だからダメなんじゃないかよ」

誠 「なアお前ら、いつから付き合い始めたんだよ」

正次「いつからって」

冴子「半年くらい前よ」

正次「……」

冴子「正次はね、ずうっと前から、私が他の人と付き合ってた時も、色々相談に乗ってくれてたの。何処か旅行に行けば必ずお土産買って来てくれたし、一人で寂しかった時

とかは、電話したらいつでも来てくれて、いつも優しく
った」

正次「出来れば忘れてかったよ、お前のことなんか。お前オレ
の気持ち知ってて他の男の話、オレにしただろう」

冴子「だってその頃はあなた私のこと好きだなんて一言も言わ
なかったじゃない」

正次「女ってのはどうしてそこまで残酷になれるんだ」

冴子「残酷になんかなくてないよ」

正次「残酷だよ」

冴子「何だよ」

正次「オレがお前のこと好きなの知ってて他の男の話をしただ
ろう！」

冴子「だから知らなかったって」

正次「嘘つけ！」

冴子「嘘じゃないもん」

正次「いや嘘だ」

冴子「どうしてそうなの？」

正次「だってそれまであれだけお前に関わって、お前本当にオ
レの気持ち何にも感じなかったかよ」

冴子「……」

正次「感じなかったかよ」

冴子「……」

正次「オレ、出来ればお前のこと忘れてかった。惨めだったか
ら。オレのことなんか絶対振り返ってなんかくれないの
分かっていながら断ち切れなくて、入れ代わり立ち代り
他の男とお前が付き合ってる話聞かされて、心にもない
相槌打ちながら、優しいフリしてるしかなかった自分の
ことが」

冴子「付き合えたじゃない」

正次「お前が妥協したからだろう」

冴子「それじゃいけないの？」

正次「……」

冴子「あなた私が好きなんでしょう、それならいいじゃない私
が妥協しようが何だろうがあなた好きな相手と付き合え
て結婚も出来る様になったんだからそれでいいじゃない」
正次「この野郎……殺してやりたい、何度そう思ったか、でも
……それでもやっぱり、オレはお前が好きだった。お前
を殺してやりたいくらい、オレが死にたいくらい、やつ
ぱりオレはお前が好きだったんだよお（泣く）」

冴子は正次の所へ来て、正次の顔を抱く。
冴子の身体にすがりつく正次。

冴子「ごめん……ごめんねあなた」

正次「冴子……好きだよ……」

二人の様子に見入る誠と勝と秋。

勝 「そりで、吉夫先生さ突き落とした理由は何な！」

正次「オレ、高校に入って初めて冴子のこと見た時からずっと
冴子のが好きで好きでたまらなかった。ミュージカ
ル研究部に入ったのもその為だったんだよ……可愛らし
い冴子の身体が、抱いたこともないくせにいとおしくて
たまらなかったんだよ。それが……オレが指一本触れた
こともない冴子の身体が、誠に毎日の様に好きな様にも
てあそばれてるのかと思うと、頭がおかしくなりそうだ
った」

誠 「もてあそんでなんかねえよ」

冴子「なんで分かったの私達のこと」

正次「見たからだよ、それは偶然、お前らが裸で舐めあつて
とこ（唇を噛み締める）あの時、お前達前にもあつたの
かもしれないけど、ミュージカル研の部室で朝まで抱き
合つて寝たことあつただろ。あの時、オレいたんだ、
外に。廊下で一人でうずくまつて、お前達と一緒に過こ

したんだ一晩！」

誠 「……」

正次 「惨めで、悔しくて、何であんな女を好きなんだろうって思っても、どう考えてもお前に罪なんか無いし、でも頭がおかしくなりそうで、もう自分が死ぬか、お前達を殺すか、もう訳が分からないくらい……（泣く）それでオレは、吉夫先生に言いつけたんだ。屋上で一人でアンテナ修理してる先生のとこへ行って、あいつら二人、放課後部屋に残ってセックスしてますって、職員会議にかけて二人とも退学にして下さいって、きつと吉夫先生も冴子のことが好きだから、オレと同じ気持ちになってそうしてくれると思ったんだ。だけど……オレが必死で訴えてんのに吉夫先生オレの顔見向きもしないでアンテナ修理しながら言うったんだ。お前それで本当に冴子のこと好きって言えるのかって。本当に好きだと言うんなら黙って冴子のすること見守ってやれって。お前のは本当

に好きなんかじゃない、単なる自分の欲望だ、冴子を自分の所有物にしたい利己的な独占欲に過ぎないって。そして、あの言葉今でも耳に焼きついて離れない、自分の浅ましさをよく見る、人を好きだと言う前に自分の下劣さに少しは気が付け……オレこう言っちゃったんだ。先生だって僕と同じのクセに……偉そうなこと言ってるけど、腹ん中じゃ僕と同じなんでしょうって。そして先生……お前なんかと一緒にするなって……気が付いたらオレ先生のこと突き飛ばしてた。先生びっくりした顔してオレを見つめたまんまみるみる落ちてって、落ちたらしばらくして動かなくなった……」

秋 「ねえほどこいてよ、放して、ねえ縄をほどこいてよ！ 早く」

縄をほどこく勝。

正次に飛びかかって行く秋。

秋 「人殺しー！ よくも吉夫先生殺したわね、よくも、よくも……」

されるがままの正次。

正次を滅茶苦茶にする秋。

誠と勝が秋を押さえる。

冴子 「ねえあなた、嘘なんでしょうそんなこと、ねえ、嘘だつて言つてえ、嘘だつて言つてよねえ、お願いだからー」

秋 「そうよ、吉夫先生が自殺なんかする訳ないもん。私つたらバカよね。私前の校長が退職する時、実は吉夫先生は自殺したんだつて教えられて、その辞表の内容聞かされた時、先生は冴子のせいで自殺したんだつて思ったのよ。だから冴子のが憎くてたまらなくなつた。その上今度は正ちゃんと結婚するつて言うし、私冴子のが許せなかつたのよ、私吉夫先生のが大好きだったから、

「ごめんね冴子」

冴子は秋の頬をひっぱたく。

誠 「これで分かつたよ、吉夫先生の辞表に書いてあつた旅立つつてという言葉の意味が。旅立つつてのはあの世へ行くつてことじゃなくて、フランスに行くつてことだつたんだよ。やっぱり先生はオレ達の思つてた通りの先生だつたんだ」

正次 「もうどうだつていいよそんなこと。秋、鍵を渡せよ」

秋 「嫌よ」

正次 「約束だろう」

秋 「ふん、あなたバカじゃないの、最初から掛かつてないわよそんなもの」

正次 「えっ？」

正次歩いて来て扉を引くとすんなり開く。

正次「!？」

「どういうことなんだ？ と不思議そうに周りを見る。

正次「……とにかくオレはもう行くからな、後はお前らで好きにやってくれ」

アタッシユケースを持って行こうとする正次。

そばへ来る冴子。

正次は冴子を無視して行こうとする。

冴子「連れてってくれないの？」

正次は冴子の身体を突き放す。

冴子「！ 何でよ正次」

尚もすがりつく冴子を正次は黙って突き放す。

冴子「正次ー！」

出て行こうとする正次の右腕を勝がつかみ、引っ張って手錠をかけると素早く自分の左腕に繋ぐ。

正次「何すんだよ」

勝 「事は殺人だべ、黙って見のがす訳になんかいかねえべや」

正次「約束しただろ、誰にも言わないって」

勝 「バカなこと言っちゃいけねえべ正次、人殺しといてそんな訳にいくか！」

正次「ちよっ、ちよっと待ってくれよ勝」

勝 「ダメだ」

正次 「なあちよっと待ってくれよ、待ってくれよおーっ！」

駆け寄る冴子。

冴子 「ねえやめてマーちゃん、やめて、放してあげてよねえ」

ガチャガチャと手錠を引っ張る正次、しかし腕は離れない。

正次 「なア、友達じゃないかよお前」

勝 「関係ないさ、逮捕するよ」

正次 「なア、さっき約束したじゃないかよー、ひどいじゃないかよこんなの、お前らが誰にも言わないって言うから信じて話したんじゃないかよー！」

冴子 「ねえお願いマーちゃん、許してあげて（泣き叫ぶ）助けよー」

てあげてよーお願いだからーもう昔のことじゃないよー」

勝 「時効にはまだ早いべ。オラは刑事だど、見逃す訳に行くか」

冴子 「先生は死ぬつもりだったんだよ、この人が突き落とさなくたって最初っから先生は自分で死ぬつもりだったんだよー」

誠 「そんな訳ねえよ、先生はフランスに行くつもりだったんだから、死のうなんて考えてた訳ねえよ」

冴子 「違うよ、先生は死ぬつもりだったんだよ」

勝 「なんでそんなことが言えるんか」

冴子 「先生ね、死ぬちよっと前に私にこんな話したのよ。オレは意気地なしだって……1人でフランスに行って絵を描こうって決めて生きてきて、それが夢で毎日頑張ってきたのに、やっとお金がたまっていざとなると、もう歳だし、自分では軽蔑してた筈の今の暮らしが居心地が良くなっちゃって、若い時みたいないな勇氣も無くなっちゃって、自分で旅立つことが出来なくなっちゃった。オレはダメ

な奴だって、こんな自分で生きてることも恥かしいって、先生私に言ったもん」

誠 「違うね。そんな筈ない、先生が自殺なんか考える訳ねえよ。正次に突き落とされなきゃ先生はフランスに行つてた筈だよ」

冴子「違うもん、それからまだあるんだもん」

勝 「何がや」

冴子「私のこと……」

勝 「えっ？」

冴子「私のこと、命よりも大切に思ってるって……もしお前が、オレのところへ来てくれたら、オレは今、自分の夢を失くしても、お前の為に生きていくことが出来るって」

勝 「そりで？ そりでお前は言うたっちゃ」

冴子「（蚊の鳴く様な声で）冗談じゃありませんって……」

勝 「はあ？」

冴子「冗談じゃないって言ったのよ」

勝 「何で!？」

冴子「何でって私その時誠のことが好きだったし、先生なんて先生だもん男の人だなんて意識したこと一度もなかったしびっくりしたんだもん……」

勝 「けんどお前言うに事かいて冗談じゃないなんて他にもう少し言い方無かったんか。そりゃあ大の男でも本気で愛してる相手からそつたらこと言われたらそら誰でも傷つくべ、そりゃあそうだべ」

冴子「だってあの時そんなまだ人の気持ちなんて考えられる程大人じゃなかったもん、相手は先生だし」

勝 「そんなこと言っても現に先生は自殺まで考えて……」

冴子「そうでしょう! ……先生自殺考えてたってマーちゃんも思うでしょう、そうなのよ、先生やっぱ死ぬつもりだったんだよお私のせいで」

正次「そう思うんならオレを放してくれよ勝」

勝 「いんや、そりはやっぱりダメだ」

正次「何で」

勝「そういう訳にはいかねー。現に正次は先生を突き落とし
てるんだし」

冴子「お願いマーちゃん、この人放してあげてえ、ねえ、この
人私の赤ちゃんのパパなんだよ、これからずっと一緒に
暮らしていく人なんだよー」

正次「今さら裁判になったって立証するのは難しいだろう。オ
レはさっき話したことは全部嘘だって言うし、物証なん
か何も無いしもちろん目撃者もない。今頃になって古
い事件をほじくりかえして何やってんだって、お前が恥
かくだけなんだぞ」

冴子「ねえお願いだからマーちゃん、この人放してあげてよね
えー」

勝「うるさいべや！」

と冴子を突き飛ばす。

突き飛ばされた冴子は転んでしまい、腹を押さえて
うずくまる。

誠「冴子！」

とっさに冴子の身体を抱きかかえる誠。

正次「冴子！」

正次も行きたいが、手錠に引かれて行けない。
正次と誠の視線が交錯する。

冴子「（泣く）ひえーん、ひえーん……」

激しい落雷音と同時に壁の冴子の肖像画がガターン
と音をたてて下に落ちる。

カセットデッキが勝手に回り出し、”シエルブルーの雨傘”が流れ出す。

秋がおもむろに立ち上がると冴子を抱き起こす。その顔は吉夫になっている。

秋 「(吉夫) 何やってんだテメエらー！ こいつにもしもの

ことがあったらどうすんだバツカヤロー、テメエら勝手に何好きなこと言ってるんだーオレが自殺なんかする訳やねえだろうが。おい勝、その手錠外せ！」

勝 「えっ？」

秋 「(吉夫) いいから外せ。な、ありや事故だ、もののはずみだ！ だからいいんだ、オレはこいつのこと恨んでなんかいねえんだ、な、だからいいだろ、許してやってくれ、なっ！ オレがいいつつってんだからいいだろうが、なっ。おい正次、お前何やってんだ、好きな女泣かして何やってんだ！ お前が守ってやらなくて誰がこいつを

守ってやるんだよ！ ええっ？ 男は男らしくしっかりしねえかバカヤロー！」

正次 「……」

秋 「(吉夫) なあ正次、頼む。あの時ひどいこと言っちゃったけどな、本当はあれは自分自身に言ったんだ。オレはお前を恨んでなんかねえよ、だからこいつを幸せにしてやってくれよ、なっ頼む！」

正次 「もうやめろーっ！」

しんとなる。音楽も消える。

素に戻る秋。

正次 「もういいよ……もうやめろよ、秋……」

秋 「……先生ならきつと、こう言うだろうって思ったのよ……私先生のこと好きだったから、先生がどんな心の持ち主だったかすごく良く分かるのよ。先生きつと、正次

のこと許してる。先生が正次に言ったことは……人を好きだと言う前に、まず自分の下劣さを知ろ……って言ったのは、もしかしたら正次に言いながら先生自分自身にも言ってたんじゃないかって思うのよ……」

正次「そうか……本当にそう思うか秋？……」

秋「うん……」

正次「……勝、放してくれ……放してくれ頼む！」

勝「ダメだ」

正次「お前今の聞いただろ！ 先生はオレのこと許してんだよ、オレのこと許してくれたんだよ！ オレ、冴子のこと幸せにするよ、先生の為にもオレ冴子のこと幸せにしてやんなきゃならないんだよ、なっ頼む、分かってくれよなあお願いだから！」

と腕を引っ張る。

勝「ダメだ！」

と引っ張り返し、柔道で正次を投げ飛ばす。

冴子「やめてよ、正次！」

正次「分かった……勝、オレ自首する。自首する！」

冴子「何言い出すのよ」

勝「……」

正次「なあ勝、オレ自首するから、この手錠外してくれよ。なあ頼むよ、それならいいだろう。自首すれば少しは罪が軽くなるんだろう、それぐらいいいだろう、してくれたって、なあ友達として最後のお願いくらい聞いてくれよ……なあ頼むよ勝」

間。

黙って鍵を出し、手錠を外す勝。

冴子「やめてよ……やめてよ正次、ねえやめてよそんなこと、この子の父親殺人犯にするつもりなの、ねえあなた！」

正次「きつと戻って来るから。必ずやり直せると思うから、それまで待っていてくれよ、な」

冴子「嫌だ、私嫌だそんなのー（泣く）」

正次はアタッシュケースを拾って壁に投げつけると、扉へ向かう。

冴子「ねえ待ってよ、ねえ待ってよ正次、お願いだからあー」

すがりつく冴子を力一杯抱きしめる。

尚もすがりつくこうとする冴子の身体を離すと立ち上がる。

開け放たれた扉へ出て行こうとする。

その瞬間正次の前で扉がひとりでにギューバタンと閉まる。

正次は引っ張って開けようとするがビクともしない。

正次「何だよ、どうしたんだよおい、どうなってるんだよお前」

と秋を見る。

黙って首を横に振る秋。

誠 「……先生だよ……先生がお前にこのまま冴子と一緒に生きていけって言ってるんだよ」

正次「そんなバカなことがあるかよ……」

と尚も扉を引こうとするが、やはりビクともしない。勝が来て一緒に引くが、やはり同じである。

勝 「どういうことだっぺ」
秋 「先生だよ」
勝 「何を言っつか、そんなバカげたことさある訳なかんべ」

尚も扉をガタガタ引くが、まったくビクともしない。
誠も来て引っ張るが同じである。

一同「……」

勝 「他に出口は無いんか」

秋 「(首を横に振る)」

勝 「じゃ、何か外に連絡する方法は？」

秋 「(首を横に振る)」

勝 「秋、家の人はいつ帰ってくるべな」

秋 「一週間は帰って来ないよ」

勝 「どうするべ」

一同「……」

勝 「ここで待ってれば誰か助けに来てくれるべ、これだけの人間が行方不明になれば探すに決まってるから、ここへも誰か探しに来っだろ」

冴子「嫌よそんなの」

勝 「それでもそれしか仕方が無かつぺや」

誠 「もし今ここで……勝が正次のこと許すって言ったら扉が開くんじゃねえのか」

勝 「え？」

誠 「勝が正次のこと許して、時効まで目をつぶるって約束して、正次も自首しないで冴子と結婚するって約束したら、扉が開くんじゃねえのか」

勝 「バカなこと言うなや」

誠 「試しにやってみたら」

勝 「ダメだ」

誠 「やってみるだけやってみたっていいだろう」

勝 「ダメだ」

誠 「何で」
勝 「先生に嘘はつけねえ」
誠 「融通のきかない奴だな」
勝 「オラは刑事だ」
誠 「……」
勝 「大丈夫だべ、3日や4日くれえなら何とかなっぺや、食べ物も少しはあるこんだし」

冴子 「嫌よそんなの」

誠 「勝、冴子は妊娠してんだぞ」

勝 「……」

誠 「勝、許してやろうよ正次のこと」

勝 「……」

誠 「なあ」

勝 「ダメだ」

誠 「……」

勝 「いくら何でも、このままこいつ見逃したんじゃ、先生の

誠 「霊も浮かばれねえ」

誠 「だから先生はこいつのことを許してるって」

勝 「なして分かる？」

秋 「分かるじゃない」

勝 「オラには分からん」

秋 「ねえマーちゃん、吉夫先生はもういないんだよ。どうしたってもうこの世にはもう戻って来ないんだよ、皆の胸の中にしかないんだよ。だから昔の胸ン中にある思い出の先生のまま、このまま皆胸にしまっぺいようよ、ねっ」

勝 「ダメだ」

秋 「……」

勝 「いくら秋の頼みでも、それだけは聞けねえ」

秋 「分からずや！」

勝 「いいか秋！」

秋 「……」

勝 「オラは生半可な憧れやオチャラケで刑事になった訳ではねえ。刑事には刑事の役割ちゆうもんがあんだ、皆がどう思おうと、例え大事な友達失おうとも、絶対守らなければならぬ法律の番人なんだ、そりが警察官ちゆうもんなんだ。皆にもそれぞれ自分の生き方や仕事のある様に、オラにもあんだ、これがオラだ」

— 同 「……」

誠 「勝」

勝 「何だ」

誠 「お前、変わったな。立派になったよ」

勝 「おだてたってダミだ」

誠 「ふっ……分かったよ、だけどこのまんまじゃいずれにしたらってここから出られないだろう、本当にこのままここじゃじっとしてるつもりなのかよ。いつ来るのかも分からない助けを待って」

勝 「そんだ」

秋 「助けなんかきつと来ないわよ。これはみんな吉夫先生が

していることだから、きつとマーちゃんが正ちゃんを許すって言うまで誰も来ないと思うわよ」

勝 「そんなこと言ってもダミだ」

秋 「皆がここで飢え死にしてもいいって言うの？」

勝 「いい」

秋 「嘘よ」

勝 「本当だ」

秋 「私との結婚も出来なくなるわよ」

秋を見る一同。

勝 「……仕方ないさ」

誠が黙って立ち上がり、勝に向かって行く。

誠 「勝」
勝 「何」
誠 「オレ達、友達だろう」
勝 「……」
誠 「こいつらのこと、幸せにしてやろうよ」
勝 「間違ってるぺ」
誠 「間違ってるない」
勝 「そんな友達なら、オラは要らねえ」
誠 「嘘だ」
勝 「嘘じゃねえ」
誠 「嘘だ、お前にそんなこと言える訳がねえよ」
勝 「……」

懐のホルスターから拳銃を取り、誠に向けて構える。
ギョツとする一同。

誠 「何だよ……悪いけど全然恐くないよ。オレが撃てるか？
勝。なあ、お前にオレが撃てるのか？ お前にオレが撃
てる訳なんかないだろう！ なあ」

勝 「……」

正 次 「やめろよ誠」

と正次は側へ来て誠と勝の間に割って入る。

正 次 「もういいよ、誠。分かったよ……ありがとうなっ、みんな悪いのはオレなんだから」

と勝の側から引き離す。

誠 「正次……お前、オレのこと許してくれるのか」

正 次 「そんなの、許すもくそもないじゃんかよ」

と誠の肩を抱く。
頷く誠。

正次「勝もごめんな。オレ、お前のこと恨む気なんか、全然無
いから、お前が悪いなんて誰も思っていないから（皆に）
なあ」

勝「（声をあげて泣く）」

秋が勝の側へ来て肩を抱く。
秋の肩に額を押し付けて泣く勝。

冴子「何か、昔みたいだね」

正次「？……」

冴子「……あの頃の、高校時代の私たちのこと、思い出したの」
正次「もう絶対に取り返しのつかない、遠い遠い昔のことだな」
冴子「違うよ、そんなことないもん、何も変わってないよ、あ

の頃と何も変わってないよ、皆同じだよ」

誰も答えない。

正次「そうだ、なあ勝、今思ったんだけど、そのピストルで扉
の鍵、撃ってみたら、よくテレビとかでやってるじゃん
か」

勝「あっ……そんだ、その手があったべや、なんで今まで気
が付かなかったんだっぺ」

と秋から離れ、拳銃を持って扉へ向かう。

勝「よし、やってみるっぺや。皆床に伏せとってくれや、跳
ね返ってきた弾に当たるといかに」

皆でテーブルを横倒しにしてその陰に身を伏せる。

勝は扉の鍵穴へ向けて拳銃を構える。

勝 「いいかあ、撃つぞ」

一発撃つ。銃声、扉に当たる音、跳ね返って部屋の中を銃弾が飛び交う音。

勝、扉を引いてみるがやはりビクともしない。

もう一度、続けて三発撃つ。三発の銃声、扉に当たる音、跳ね返って部屋を飛び交う弾の音。

秋 「痛いっ！」

ハツとして秋を見る勝。

腕を押さえてうずくまる秋。

勝 「秋！（と駆け寄る）」

秋に駆け寄る一同。

勝 「秋、大丈夫かっ！」

秋を抱き起こす勝。

秋 「痛いっ痛いよー」

痛そうに右腕を抱え込んでいる秋。

勝 「ちくしょう、扉は、扉はどうだ」

扉を引いてみる誠。

誠 「だめだ、やっぱりビクともしねえよ」

正次「クッソー、何てことなんだよ、チクショウ！」

と床を叩く。

冴子「早く手当てしないと、すごい出血の量だよ……」

勝「そんなこと言ったって……クッソー何か外に連絡する方法はないんか！」

誠「ねえよ！ 何にも」

勝「秋……秋！ しっかりしろ」

秋「先生が……先生が正次を許してやってくれって言ってるのよ……」

宙を見上げて語りかける勝。

勝「ちくしょう、吉夫先生！ あんたどういうつもりぞな、

このまま秋が死んでしまってもいいんか、先生、先生お

願いだべ、秋のこと助けしてくれえ、お願いだ、オラ秋のことが好きなんだ！」

秋「勝……正次のこと……許してあげて……先生は正次を許せて……言ってるの……私には分かる……ねえ……お願いだから……冴子の為に……そうしてあげて……」

勝「ああ、本当にそれでこの扉が開くならそうするよ、先生、分かった、正次は見逃すよ、今日聞いた話は皆忘れるから、今すぐこの扉を開けてくれるならそうするから、秋のこと助けてくれ、頼むよ！」

スーッと扉が開く。

外から眩い光が入ってくる。

勝「（驚く）」

正次「……」

冴子「先生……ありがとう」

勝 「冴子、正次の携帯を持って上行って救急車呼んで来てくれ」

正次はポケットから携帯を出して冴子に渡す。

冴子「うん」

と受け取って階段を駆け上がって行く。

勝 「秋！ 助かったど、秋！」

秋 「……」

勝 「気を失っとる。ちくしょう、取り敢えず皆で上さ運ぶべ、
さア」

誠 「ああ」

正次「よし」

と秋を担ぎ上げる三人。

その時秋の左腕がダラリと下がり、手に持っていた
何かがガタンと床に落ちる。

誠 「何だこれ」

と拾ってみる。金属で出来た小さなボックス状の物
(リモコン)で小さなスイッチが幾つも付いている。
誠がスイッチを押すと”ピッ”と小さな電子音がし
て鉄の扉が音をたてて勝手に閉まる。
思わず顔を見合わせて秋をその場に下ろす三人。
もう一度押すとまた”ピッ”と音がして扉が開く。
そこへ冴子が戻ってくる。

勝 「救急車は？」

冴子「うん、呼んだ」

また別のスイッチを押すと”ピッ”と音がして大きな落雷の音が鳴る。
続けてスイッチを押す誠。
落ちていた冴子の絵がスルスルと元の壁に上がって行く。
また別のスイッチを押す。
カセットが勝手に回りだし”シエルブルーの雨傘”が流れ出す。
スイッチを切るとしんとなる。
リモコンを置く誠。

誠 「全部秋がやってたんだ」

秋を見つめる一同。
勝をじっと見つめる正次。
正次の顔を見る勝。

間。

勝 「……正次、お前はいいから早く取引先の銀行さ行って来い、ここはオラらに任して、な」

正次「勝」
勝 「吉夫先生は皆の憧れだった。皆に尊敬されて、皆の為に尽くしてくれて、カッコ良い男の生き様ちゆうもんを、オレらに見してくれた。んでもおっちょこちよいなところもあって、それが災いして最後はちよいとマヌケな死に方さしてしまったけども、オレ達皆の胸には、いつまでもあの頃の先生のまま、光り輝く思い出として生きる」

正次「……」

勝 「どうした、早く行け」

正次「……」

誠 「正次、どうした」

正次「怖い」

誠「えっ？」

正次「怖いよ」

勝「何がな」

正次「……これから先、生きて行くのが怖い」

勝「何を言ってるんだお前」

正次「これでいいのになって、こんなんで、本当にこれから先、冴子と幸せにやっていけるのになって……」

誠「そんなの皆同じだろ、誰だって生きて行くのは怖いよ、それでも生きて行かないきゃ仕様がねえから皆頑張ってるよ、生きてんじゃねえかよ、お前がそんな弱気でどうすんだよ！」

勝「そうだ、いいか、これから先、オラや誠もお前の秘密を一緒に持って生きていかにやならんのだぞ。オラらはもう、離しても離れられん仲になってしまったんだぞ」

正次「（感極まって泣く）」

誠「なあ、オレ達皆、昔からずっと仲良かったじゃんかよ、これからもずっと助け合って生きて行こうよ、なっ正次」
勝「そうだ、ホントのホントの友達だ」

”カチャッ”と音がしてカセットデッキのスイッチが入り、テープが勝手に巻き送られていく。

勝「誠、またリモコン触ったんか」

誠「いや、オレは何もやってねえよ」

巻き送られているテープが途中で止まり、再生を始める。

誠と冴子の歌う”シェルブールの雨傘”の終わりの部分である。

吉夫の声「ようし、良かったぞ。お前らやれば出来るじゃんかよ

！ なア皆」

誠 「先生の声だ……」

勝 「昔の練習中に録音してたテープぞな」

吉夫の声 「さあ、じゃあ後は本番を迎えるだけだな」

冴子の声 「やだー何か緊張しちゃうよね」

誠の声 「今になってオレも何だか自信無くしてきちゃったよ先生」

吉夫の声 「バーカ！ 自信持て、お前らは良い！ オレが言うん

だから間違いないぞお、最高だよお前らは。なっ、後はもう本番なんだからお前らで頑張るっきゃねえんだぞ。

いいか、舞台に乗ったらオレはもう何もしてやれないんだからな、いいなっ！ おい、しっかりしろよお前ら」

勝の声 「そうだよ、オレ達も一緒にやるんだから、お前らだけじゃないんだから、大丈夫だよ、なっ正次」

正次の声 「そうだよ、お前ら最高だったよ、オレ絶対自信持ってるよと思うよ」

秋の声 「今まで皆一緒に頑張ってきたんだもんね、絶対成功するよ」

誠の声 「うん、やっとここまで来たんだもんね、絶対後悔なんかしたくねえもんね、きっと良い舞台にしような冴子」

冴子の声 「うん」

吉夫の声 「よし、そうだ！ そういうこった。それじゃお前ら、後は本番！ しっかりやれよ、なっ！」

一同の声 「はいっ！」

テープの音、途切れる。

立ち尽くす一同。

間。

勝 「正次、何してる、お前は早く仕事に行けって言ったろ！」

正次 「あっ……ああ、分かったよ」

と冴子からアタッシュケースを受け取り、駆け出す、扉の前で立ち止まり、皆を見る。そして行く。

誠 「オレ、やっぱり辞めないよ」

勝 「えっ？」

誠 「ミュージカルだよ……こっちでまた、オーディション受けるよ」

勝 「そうか」

誠 「オレ、先生みたいにこれからも生きて行くよ、先生が生きられなかった三十代を……見てなよ先生、必ず先生みたいにかっこ良く頑張ってみせるから」

勝 「オラはこれからも警察官として生きて行く、それから、秋と結婚する。先生、見ててくれ、秋と幸せに生きて行くから、先生のごことは生涯忘れんから、なあ先生」

誠 「よし」

勝 「ああ」

秋を担いで出て行く誠と勝。

続いて行く冴子。

扉の前で一人立ち止まる冴子。

振り返る。

冴子 「先生……先生、ありがとう……さようなら」

出て行く冴子。

暗転。

おわり